

厚生労働省委託事業 令和2年度がん総合相談に携わる者に対する研修事業
第1回改訂委員会 議事録

日時 令和2年6月30日(月) 10:00~11:30

場所 WEB で開催

参加者 佐々木(北里大学病院)、若尾(国立がん研究センター)、石川(静岡県立がんセンター)、松本(愛媛がんサポートおれんじの会)、平井(大阪大学大学院)、秋月(都立駒込病院)、小川(国立がん研究センター)、山崎(厚労省)猪股(厚労省)、工藤(青海社)、坂井(日本サイコオンコロジー学会事務局) 敬称略

1.今年度の事業予定(小川委員)

- 【資料3】実施要綱…基本的には昨年までの流れを継続。①ピアサポーター養成研修の実施、②昨年度行ってきた意見交換会や講師派遣というように各都道府県への相談支援を実施すること、③ホームページの運用を実施する。
- 【資料2】委員の構成について…改訂委員会、ピア養成WG、短期サポートグループWGの編成、その委員の先生については大きな変更は無し。短期サポートグループWGではがん診療連携拠点病院・地域統括相談支援センターの職員を対象にした、サポートグループの企画・運営のための研修会を行うため、グループ員を増やした。またピア養成WGとのプログラムの橋渡しをするため2人の先生に兼任の形で加わっていただく予定。
- 【資料4】今年度の事業方針…
 - ・今までの事業の流れについて再確認。昨年度、意見交換会等を通して、行政がピアサポートに関する知識や理解がまだ始まった段階であること、医療者との協同するに至っていないことなどといった課題があった。
 - ・今年度は実施要綱を踏まえ、
 - ①ピアサポーター養成研修の開催(各県がそれぞれで実施できるように支援していく)
 - ②都道府県や地域統括相談支援センターなどへのサポート(意見交換会といった話し合う場の設定や医療者向けの研修会の開催など。体制をつくるための手引きのようなものを作成することも考えたほうがいいかもしれない)
 - ③ホームページでの情報提供。資材の提供などをより充実させていく。
 - ④がん診療連携拠点病院向けに、サポートグループ、がんサロンの中でピアサポーターと連携するためのスキルを学ぶための研修会の実施の4点を大きな方向性として検討していきたい。
 - ・約450か所あるがん診療連携拠点病院をカバーしていきたいと思っているので、④

の研修会はある程度の回数を実施する必要があるかと思う。座学の講義だけではなく、OJT の形でも研修が必要かと考えている。新型コロナウイルスのこともあり、講義とトレーニングの部分は切り離し、機会を確保することも検討事項になるか。

・ピアサポートに関するニーズの把握の調査を行う予定。ピアサポートの在り方を明確にしたいと考えている。

- (若尾委員)今年度事業が3年目になる。3年で終わることを想定しまとめに入ることを検討すべきなのか、事業が来年度も続く可能性を視野に入れて進めるべきか。
⇒(厚労省がん疾病対策課)事業の継続性については予算の協議が必要であるため、この場では明確には申し上げられない。しかしピアサポートが重要であるという認識は変わらない。計画の見直しは適宜必要と考えているので、今回ニーズの調査を入れている。昨年度、民間団体(患者団体含む)を対象にした相談窓口に関する調査では、病院では提供できないピアサポーターの力は患者さんのためになっているという結果も見られたので、ピアサポーターと専門職、病院と地域という場の違いといった特徴を踏まえながら整備していきたいと考える。
- (佐々木委員)ポストコロナ、ウィズコロナになり、ピアサポートの在り方にも変革が求められている時期と思う。ICT や電話を活用した研修プログラムもこの事業で検討すべきなのかもしれない。
⇒(小川委員)ネットや SNS といったツールを使った交流もコロナのことがあり増えてきていると思う。ただ、対面とは違った難しさがあると思う。例えばチャットだけだと言葉がきつい印象に捉えられてしまうといった具合に。対面と違った特性は伝えていく必要はあるかもしれない。
⇒(厚労省がん疾病対策課)オンラインといった手法も含めた、ピアサポートの提供を考えていただきたい。これまでとは違った視点も入れながら取り組みを進めていただければと思う。
- (松本委員)自団体でもオンライン交流会などを開催しているが、参加者が少なく苦戦を強いられている。オンラインをつかった交流を行う際のハウツーなども必要ではあるが、その一方で「ピアサポートとはいったい何なのか」という本質的な部分を考えていく必要があると感じている。
- (小川委員)対面で会うのが難しく、WEB ですぐ集まるのもなかなか難しいという課題。これはネット環境やリテラシーが不十分なのか、このようなツールがあることを知らないのか。どのような事情があるか、教えていただきたい。
⇒(佐々木委員)北里大学病院のがんサロンでは普段参加者の名簿を作っていなかった

ため、WEB でやりますという案内ができないといった課題があった。一方神奈川県がん連でやったオンライン交流会では、「WEB だから」という点で参加してくれる方もいた。北里大学病院のがんサロンは 7 月から再開予定だが、感染拡大防止のために参加者に連絡先をお聞きすること、人数制限をすること、飲食禁止などになり、会の形が変わりつつある。

⇒(松本委員)今まで交流会に参加できなかった人、特に遠隔地や島嶼部にお住まいの方にとっては参加しやすいツールだと思うが、オンライン交流会への参加者はあまり多くない。このような WEB 会議のツールを使い慣れていないこともあるし、画面越しに話すことに抵抗があるという声もある。

⇒(石川委員)WEB の会議に参加すると、話すタイミング・表情などが対面で行う時と違うと感じ、人によっては戸惑ってしまう人もいると思うが、手段が増えることには賛成。医療機関は患者さんを守りたいという点で、安全面を優先してしまうと思う。今年度事業を進めるにあたって、安全面との兼ね合いで実際どのくらいできるのかという不安がある。WEB でやる場合にできることを整理することなどは今年度できることかもしれない。

- (石川委員)サポートグループについて。がん診療連携拠点病院職員を対象に研修し、広まるという期待感はあるか。

⇒(小川委員)がんサロンで集いの場を設けることはどの施設でもやられていることが多いが、ピアサポーターと一緒に、という形は意外に知られていない。体験談を聞く場を作る、できれば一緒にファシリテーターとして入ってもらい、という形を示すだけでも、取り組みを検討してくれるところはあるのでは。

- (石川委員)サポートグループ、がんサロンといったこれらの活動を先導してくれる医師がいるかないかでも取り組みが変わると思う。

⇒(小川委員)がんサロンの管理者も含めて一緒に受講してもらい方が、理解が進むかもしれない。

2.短期サポートグループWG 今年度の方針 (平井WG長)

- 昨年度まで作成してきた「がんサポートプログラム企画の手引き」を基盤に、研修会のプログラムを作成することを今年度進めていく。
- サポートプログラム、サポートグループの 2 種類の言葉が出てくるが、大きな概念として「サポートプログラム」としている。がんサポートプログラムの目的としては、「がん患者やその家族が、さまざまな悩みや不安、困りごとを軽減させ、安心して自分らしく暮らせるようになること」。これを実現できるような、機会を拠点病院や各病院や地

域のリソースを使い提供することを整備していく。自分の悩みや体験を聞いてもらえる場を作ること、他の人に役立てる機会を作ることを目指す。この循環の場づくりが十分進んでいる施設もあると思うが、不十分な施設も多くあると思う。

- 分の悩みや体験を聞いてもらえる場を作ること、他の人に役立てる機会を作ることのこの 2 つの機能を果たすにはグループ活動が適切かと思う。グループには医療従事者が主体のもの、医療従事者とピアサポーターが協働するもの、ピアサポーターが主体になるものがあるが、事業では医療従事者とピアサポーターが協働するものが目指す形になると思う。ピアサポーターの確保が難しい、という声もあるので、まずは医療者がファシリテーターなどを行っていき、そこに参加していたピアがのちにピアサポーター養成研修を受けて、ゆくゆくは主体的に動いていただく、ということも十分あり得る形かと思う。
- 手引きの中にフローチャートを入れている(『がんサポートプログラム企画の手引き』p44)。自施設の取り組みを振り返ることができる。フローチャート 1 番上の 4 つの点の実現できているかを確認し、不足している部分を補っていく。
- 養成されたピアサポーターが活躍できる場が十分でないという声も多くあり、またピアサポーターが安心して活動できるためのインフラの一つとして病院のスタッフが責任を持って運営をするサポートグループの整備が必要。
- これらを踏まえて、『がんサポートプログラム企画の手引き』の内容の検討を行いながら、がん診療連携拠点病院のスタッフ、職員扱いになっているピアサポーターを対象にした、院内サポートグループの運営者&ファシリテーター養成のための研修プログラムを作成していく。
- 研修プログラムの KPI：研修プログラムを受けた人がどのようなスキルを身に着けるべきか、という点は現在 WG で検討・作業を進めている。
- 研修の方法については、事前の e-learning なども検討しているがインフラなどの点で難しい部分もあるかと思うので要検討。自施設の取り組みの評価をレポート作成、半日～1 日程度の集合研修を組み合わせる形で検討している。新型コロナのこともあるので、全面的にオンラインでの開催も検討しなくてはならないか。
- 7月に第2回会議、8～9月に第3回会議でプログラムのたたき台作成～プログラムの確定、その後も議論を重ねながら12～1月ごろの開催を目指したい。
- (若尾委員)プログラムの中身について、ピアサポートの基本的な知識は『ピアサポーター養成テキスト』を活用すると良いかと思う。『がんサポートプログラム企画の手引き』と重複する部分もあるので、連携しながら進めていかれるといいのでは。現段階では自施設を評価する手法がないので、有用だと感じた。
サロンに参加する人はピアサポーター養成研修を受けていることを前提にせずまったくの初心者だけでも、医療者がグループ対応できるようなスキルを身に着ける、という

認識で合っているか？

⇒(平井 WG 長)ピアサポーター養成研修会で、行政・医療者向けの講義をやっていた吉田委員にグループ員に入っていたので、養成テキストを活用してきたいと思っている。また「人前で話してみたい」という動機づけの無い人の方が多いと思うので、集まってそれぞれの思いを語り合う場を医療者が定期的に設定しサポートすることをまずは目指したい。このような場に複数回参加してもらいうちに、人の役に立ちたい、スキルをもっと身に着けたいと思う人がおそらく出てくるかと思うので、そういう方にピアサポーター養成研修を受けてもらいスキルを徐々に身に付けてもらえれば次第に医療者側の負担も軽減されていくのではと考えている。

- (佐々木委員)ピアサポーター養成研修を受けた人が自信をもって自分の体験を話せるようになり、北里大学病院のがんサロンに参加してくださっている。サロンで育てていくという教育システムが大切かと思う。この研修会は施設ごとの受講になるか。
⇒(平井 WG 長)想定としては複数の施設からの参加を募る予定。規模は大きめに想定している。
- (松本委員)「可能な限り短期間で拠点病院をカバーする」と小川先生の資料で説明があったが、全ての拠点病院をカバーするという意味で、地域ごと研修を行うような形になるか。
⇒(平井 WG 長)そのような形をイメージしている。地域ごとで開催することによって病院の職員同士のネットワークの構築にもつながるのではと考えている。
- (若尾委員)相談支援センターのネットワークはできていて、サロンの運営についても関心を持っている方が多い。関心を持っているけれど、参加者が集まらないという問題もあるので、このような自施設の評価という新しいアプローチは有用だと思う。1施設一人ではなく、責任者や事務の方も含めグループで参加していただくとより速く広まるのかなと感じた。
- (厚労省がん疾病対策課)今年度第1回都道府県がん診療連携拠点病院連絡協議会 情報提供・相談支援部会(収録形式)でピアサポートに関する項目も取り上げていただいたが、聴講された方から何かレスポンス等があったか。
⇒(若尾委員)現状ではレスポンス等は把握できていない。県によって状況は違うが、サロンの活動には積極的に取り組もうとされている。相談支援センターの方にWGに加わっていただいたり、ヒアリングしていただいたりしてもよいかと思う。
(厚労省がん疾病対策課)特にコロナ禍において、場を提供する側の拠点病院相談支援センター等の状況把握は必要であると考えており、ヒアリング等はぜひお願いしたい。

(参考資料 若尾委員提供) :

第 14 回 情報提供・相談支援部会 の資料

https://ganjoho.jp/med_pro/liaison_council/bukai/shiryo14.html

相談支援センターチェックリスト 項目 2 つ目にピアサポートあります。

https://ganjoho.jp/data/med_pro/liaison_council/bukai/data/shiryo12/05.pdf

- (石川委員)自施設の評価をすることは今までにない取り組みで、とても良いと思った。相談員はこれらの活動に積極的な方も多い。相談員の方が看護師だと、認定看護師・専門看護師の方もいるので、例えば学会等で紹介できれば取り組んでくださる方もいるのでは。MSW の方も協議会があるそうなので、このような機会に声をかけてみてほしいのかと思った。
⇒(平井 WG 長)どういう形態にやるのかにもよるが、どこに声をかけるかということも検討していきたい。

3.ピアサポーターの養成研修について

- (小川委員)ピアサポーター養成研修会の開催として長崎県が候補に挙がっている。また集合研修ができない際の代替手段などを検討する必要があるかと考えている。
- (秋月 WG 長)昨年度までに養成研修の形はおおむねまとまっているので、それを踏襲することは問題ないと思う。ロールプレイもあるが、言葉ベースのフィードバックが多いので、オンラインでもできなくはないかと思う。ただ、オンラインで 2 日間連続で研修するのは大変なので、細切れに分けるなどの方法はありか。オンラインでは資料をすぐにシェアできるなどのメリットがある。非対面型での研修会を検討する必要があるれば、検討することはできると思う。
熟練した教育ができる人が多くないため、今後全国で養成研修を展開していくとなるとオンラインなどの方法もあった方が、負担が偏らずに済むか。
短期サポートグループ WG で実施するの医療者向けの研修は、ピアサポーター養成研修の発展版になると思った。例えば、昨年度養成研修をした三重県に医療者向けの研修を受けてもらう、というように使い分けることもありかなと感じた。
- (松本委員)各地でオンラインが広がっていてメリットも感じているが、オンラインならではの難しさも感じている。例えばオンラインでピアサポートを行うときのハウツーをまとめたものが A4 用紙 1 枚ぐらいの分量でもあるといいなと思った。

- (秋月 WG 長)オンラインピアサポートを行う時の工夫・注意点と、オンラインで研修を行う時の注意には、それぞれスキルの違いがあると思う。それらの注意点をまとめることはできるかと思う。病院内で、オンライン交流会・ピアサポートを行うことは今の時点では考えていなかったが、これも検討すべきか。
- (若尾委員)対面だけでなく、オンラインなどいろんな場でもピアサポートができるということで、Tips の形で 1 枚程度でもあると有用ではないかと思う。
- (佐々木委員)北里大学病院でもオンラインの可能性を探っているので、数は少ないがオンラインを取り込む病院も出てくるかと。
- (松本委員)対面が厳しく制限されている入院中の患者さんがオンラインの交流会に参加できてとてもよかった、という声もお聞きした。

4.その他

- (若尾委員)『がんサポートプログラム企画の手引き』は現在 2019 年度暫定版になっているが、こちらは今年度 2020 年度になり、正式に公開される形になるか。
⇒(小川委員)『ピアサポーター養成テキスト』は訂正は行わず、『がんサポートプログラム企画の手引き』は養成テキストとの整合性等なども見ながら、2020 年度版として正式リリースできればと考えている。